資料１

Ｆ＆Ｔ感情識別検査実施手引き

目　　次

第１章　Ｆ＆Ｔ感情識別検査の概要 ……1
　１．Ｆ＆Ｔ感情識別検査開発の趣旨と目的 ……1
　２．検査の構成と特色 ……2
第２章　Ｆ＆Ｔ感情識別検査実施要領 ……3
　１．適用範囲……3
　２．Ｆ＆Ｔ感情識別検査の実施方法 ……6
　３．採点と結果の整理 ……10
　　Ｆ＆Ｔ感情識別検査チェックシート（Ⅰ）記入例 ……11
　　Ｆ＆Ｔ感情識別検査チェックシート（Ⅱ）記入例 ……13
第３章　結果の解釈 ……15
　１．「正答率」の意味するもの ……15
　２．Ｆ＆Ｔ感情識別検査チェックシート（Ⅰ） ……16
　　－コミュニケーションタイプの考え方－
　３．コミュニケーションタイプとその対応……17
　４．「混同の傾向」の意味するもの ……21
　５．訓練可能性の評価 ……22
第4章　対人コミュニケーションにおけるもう１つの困難 ……23
第5章　活用例 ……25
　１．事例１：音声依存・Ｔタイプ／パタンＬ……25
　２．事例２：相補タイプ／パタンＫ……30

付録
　１．記録用紙（表紙３枚・共通５枚　計８枚） ……36
　２．正答表　（３枚）……44
　３．採点用紙（１枚）……47
　４．Ｆ＆Ｔ感情識別検査 チェックシート（Ⅰ）　（２枚） ……48
　５．Ｆ＆Ｔ感情識別検査 チェックシート（Ⅱ）　（１枚） ……50
　６．参考（表情識別訓練の有無を検討するための１６パタン） ……51

第１章　Ｆ＆Ｔ感情識別検査の概要

１．Ｆ＆Ｔ感情識別検査開発の趣旨と目的

知的発達の遅れの有無や障害の程度に関わらず、対人関係を円滑に行うことに困難が認められる人々がいる。彼らが社会に受け入れられるためには、そして、生活の質(Quality of Life; QOL)を高めるためには、対人的なスキルのレベルアップが重要であることは疑いがない。ここでいう適切な対人スキルとは、自らが自分の感情や要求を適切に「表現する」こと（表現行動）及び、他者が表現した感情や要求を適切に「理解する」ことに支えられるものである。そして、本検査は、後者の「理解する」ことに焦点をあてて開発されたものである。

ところで、「理解する」対象となる表現行動にはいくつかの形態がある。例えば、話の内容、話し方、表情、身ぶり、そして服装や身だしなみ、などもこうした表現行動に含まれる。そして、これらの表現行動は、受け手に理解されて初めて意味を持つ。したがって、私たちの日常生活では、「なにを言われたのか」だけでなく、話し方や表情など「どのように言われたか」に含まれた相手の感情にも、注意を払うことが必要となる。なぜなら、時には感情の方が話の内容よりも重要な意味をもつことがあるからである。

感情は、主として非言語的な形態（表情、音声、身ぶり）を通して表現されるが、相手の感情に適切に反応してこそ、対人関係は円滑に維持される。例えば、相手の感情を誤って判断したために不適切な行動をとり、その結果、対人関係を損なってしまうことがある。より具体的には、職場で上司が怒っているのに、それを怒っていないと判断して行動するような場合である。このようなことが続けば、その職場であたたかい配慮を受けることは難しくなる。その結果、職場の人々から受ける言葉や態度が、次第に厳しいものとなっていくのは想像に難くない。もちろん、これとは反対に、同僚や上司が特別否定的な感情を持っていないにも関わらず、相手の表情や音声を誤って判断し、「自分は嫌われているのではないか」と思いこむこともあるだろう。この場合は、周囲よりも、本人のストレスが高まることが予想される。

こうした、感情の読み違いは、障害の有無に関わらず認められるが、特に知的な発達に遅れが認められる場合には、表情から他者の感情を識別する際に、健常者とは異なる特徴を持つことがわかっている。その特徴とは、『幸福』と『怒り』、『幸福』と『嫌悪』など、快－不快の感情間に比較的高い確率で混同が認められることである。また、『怒り』と『悲しみ』に関しても、健常者と比較して混同する確率が高い。そして、こうした混同は、対人関係でトラブルを生じさせる要因の１つとなっている。さらには、「感情の読み違い」がもとで起こる対人関係のトラブルは、精神状態を不安定にし、学業や仕事の継続を妨げる要因の１つとも考えられる。

しかしながら、日常の生活場面の観察の中から、このような能力を客観的に測ることは難しい。特に、相手の表出した感情を他のどの感情と読み違えているのか、といった感情間の混同の傾向について知ることは難しいといえる。

そこで、表情や音声といった非言語的な形態でのコミュニケーションについての評価が可能な検査の開発を目指した。なお、本検査は、幼児や知的な発達に遅れのある者を含む広範な対象に適用可能である。

２．検査の構成と特色

Ｆ＆Ｔ感情識別検査は、『音声のみ（tone）』『表情のみ（face）』『音声＋表情（tone&face）』の３条件から構成される。検査では条件毎の「正答率」、及び、これらの条件を組み合わせることで、他者の感情について、対象者が「主として音声」、「主として表情」のいずれから、より正確な情報を得ているのかを知ることができる。

また、Ｆ＆Ｔ感情識別検査では、条件毎の「正答率」に加えて『幸福』『悲しみ』『怒り』『嫌悪』の４感情間の「混同の傾向」について知ることができる。

◆**「正答率」と**は、相手の『音声のみ』、『表情のみ』、『音声＋表情』のそれぞれから、どのくらい正確に相手の感情を読みとることができるか、を示す指標である。

また、表情から相手の感情を識別することが苦手でも、音声からは比較的高い確率で相手の感情を識別できる、といった対象者毎の傾向についても知ることができる。

◆**「混同の傾向」と**は、「どの感情」と「どの感情」の間で混同が起こっているか、を示す指標である。

混同のうち「怒り」と「嫌悪」の混同は、ともに不快な感情同士の混同であるため、対人場面で比較的問題となりにくいといえる。しかし、「怒り」や「嫌悪」などの**不快な感情を**「幸福」といった**快の感情と混同している場合**は、そのことが対人関係における不適応の原因の１つとなっていると考えられる。また、ほとんどの音声や表情を「怒り」あるいは「嫌悪」と解釈するといった傾向を持つ被検査者の場合は、注意や指示に対して過敏に反応するなどの行動と関連が深い可能性が示唆される。

（ こうした傾向を区別するために、採点用紙では、「正答」並びに「混同があっても問題にならない回答」について、網掛けをして示した（p.47参照）。したがって、それ以外の部分の数字が大きいほど、混同の問題が大きいことが示されている）

また、Ｆ＆Ｔ感情識別検査では、適切な視知覚認知検査と併用することにより、訓練可能性について検討できる。視知覚認知検査の結果、図形の認知に特別な困難が認められない場合は、特に訓練可能性が高いと考えられる。この場合は、訓練により表情からの情報を的確に利用できるように改善を図ることが望ましい（『表情識別訓練マニュアル』を参照されたい）。

一方、表情は「図形」の１つであるため、視知覚の発達が十分でなく、図と地の弁別ができなかったり、大きさや傾きが変わっただけで同じ図形であることがわからないなどの場合には、「表情」から情報を読みとることそのものが困難である可能性が高い。このような場合は、表情以外の情報をうまく利用することを指導する必要があると考えられる。

第２章　Ｆ＆Ｔ感情識別検査実施要領

１．適用範囲

適用範囲

この検査は、「幸福(嬉しい)」「悲しみ」「怒り」「嫌悪」の４つの感情について、分類できる者を対象とする。正しく利用されるための対象年齢は、生活年齢で７歳以上を一応の目安とするが、５～６歳児であっても４感情の分類ができる者であれば、対象者となる。

また、知的な発達に遅れが認められる場合(精神年齢が７歳に満たない場合)でも、４感情の分類ができる者であれば、対象者となる。

なお、適用範囲であるかどうかを査定するためには、以下の査定課題１)、２）のいずれかを行う。

１）４感情の分類についての課題－１

例えば、「うれしい」という感情に対して、「うれしい」という言語が対応しているかどうかを査定するために行なう。

「○○さんは、どういうときがうれしいときですか」
「○○さんは、どういうときが悲しいときですか」
「○○さんは、どういうときが腹が立ったり、怒ったりするときですか」
「○○さんは、どういうときが嫌な気持ちになるときですか」

とそれぞれの感情について尋ねる。検査対象者(以下、対象者とする)の回答は原則として検査者が記入する(緘黙の傾向がある対象者の場合は、自筆での記入とする)。回答は、具体的かつ複数であることが望ましいが、検査者は対象者の回答を故意に引き出したり、誘導したりすることがないように気をつける。

また、対象者が２人以上の場合は、対象者自身が記入する（自筆記入の負荷が大きいことが予想される対象者の場合は、他の対象者の発言に影響されることを避けるため、個別に聞き取りをすることで対応する)。

それぞれの感情について十分な回答が得られない場合は、２）の手続きを行う。

２）　４感情の分類についての課題－２

表１に示す２０の場面について、それぞれ「次の場面では、みなさんはどんな気持ちになりますか」と尋ねる。複数の項目にわたって不適切な回答があった場合、特に「うれしい」を回答として期待する項目に対して「怒る」や「いやだなぁ」というが回答あった場合には、感情のラベリングに問題がある可能性があるため、検査の対象者としては除外する。これらの対象者に対しては、評価に先立って、感情を表す言葉と感情との関係についての指導が必要といえる。なお、図１に場面毎に喚起される感情の傾向を示したので、参考にされたい。

表１　４感情の分類についての課題(場面理解)

	場　　面
①	プレゼントに欲しかったものをもらったとき
②	好きな人と別れるとき（卒業式など）
③	大切にしていたものをとられたとき
④	嫌いなもの（蛙やごきぶりやみみずや蜘蛛など）をみたとき
⑤	大切にしていたものを壊されたとき
⑥	バカにされたり、いやなことをされたり、悪口を言われたとき
⑦	並んでいたのに、横から割り込まれたりしたとき
⑧	大切にしていたものを「自分で」壊したり、なくしたりしたとき
⑨	自分のこと（気持ち）が分かってもらえなかったとき
⑩	誉めてほしい人（上司や親、先生など）に誉められたとき
⑪	「自分が」悪いことをして叱られたとき
⑫	しばらく会っていなかった大好きな人に、偶然出会ったとき
⑬	自分勝手な人やマナーの悪い人（電車の座席に寝そべっている人、一人で二人分の席を取っている人など）を見たとき
⑭	ガラスや黒板を爪で引っかく音を聞いたとき（銀紙やラップを間違って食べてしまったとき）
⑮	楽しいこと（遊園地に行ったり、旅行に行くなど）があったとき
⑯	仕事に集中しているときに話しかけられたり、べたべたとさわられたり、邪魔されたとき
⑰	おいしいもの、大好きなものを食べたとき
⑱	大好きな（大切にしている）人やペットが死んだとき
⑲	１週間ずーっとお風呂に入っていない人や汗などでひどく汚れた服をきた人が隣に座ったとき
⑳	宝くじがあたったとき

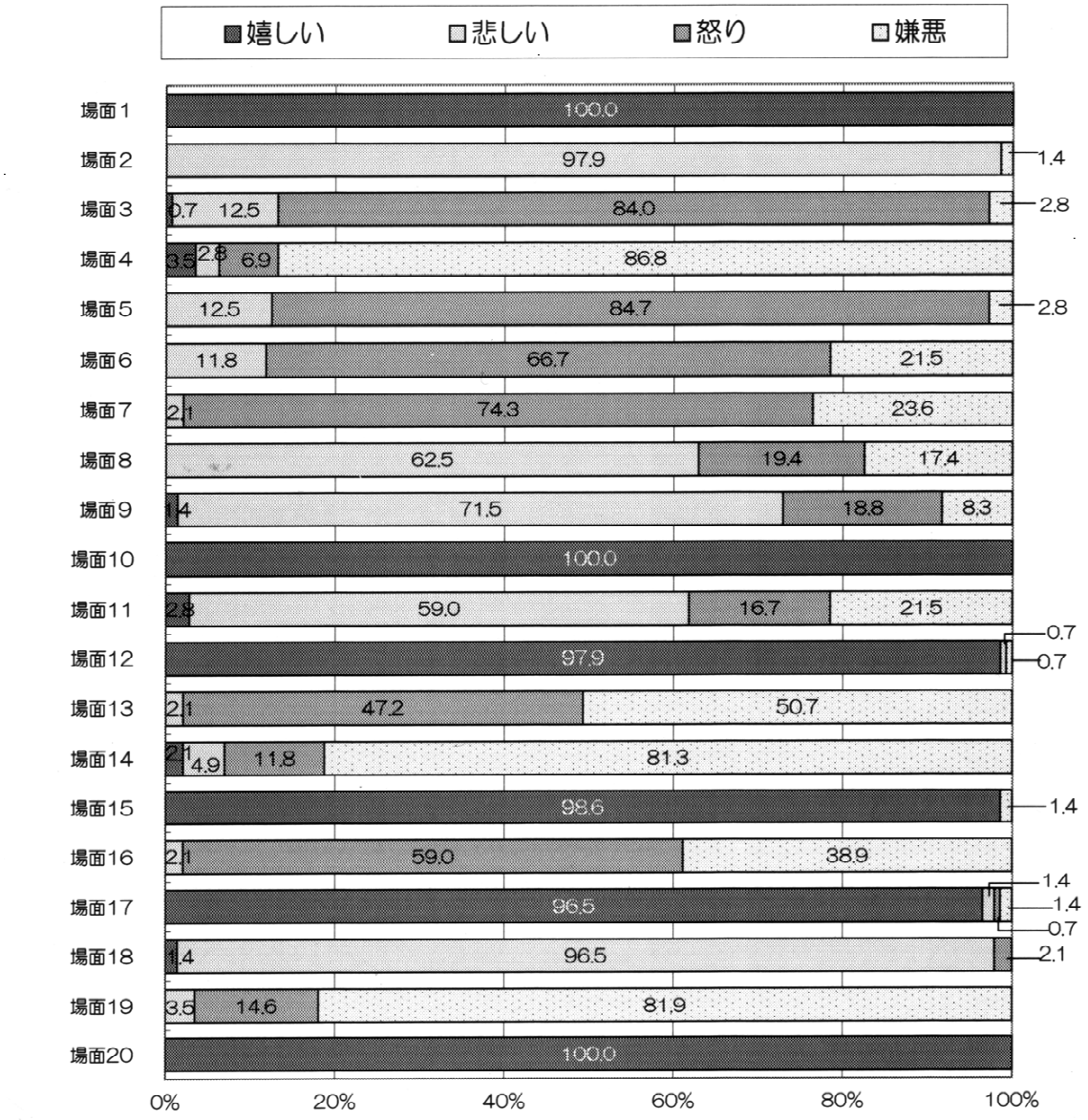


図１　場面毎に感じる感情の比率

２．Ｆ＆Ｔ感情識別検査実施要領

１）検査の準備

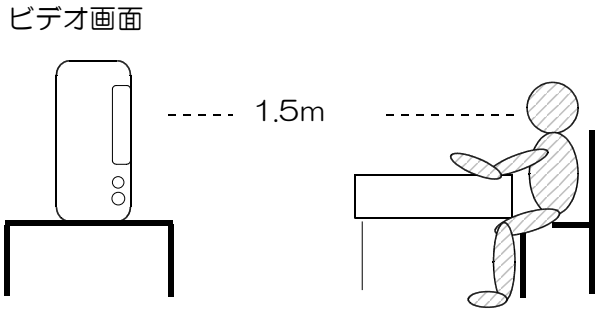
用意するもの

① 検査用ビデオ　　１本
② 再生用ビデオデッキ＋モニター　　１台
③ 記録用紙
（「音声のみ」「表情のみ」「音声＋表情」各６枚、計１８枚＝１セット）
④ 採点用紙　　１枚
⑤ 筆記用具　(鉛筆２本程度)

③と④については、巻末のページをコピーして使用すること。

２）検査室の配置

１回に１人から４人の小グループで検査を行う。モニター画面は対象者の正面に配置し、対象者が斜めから画面を見ることがないように配慮する。ビデオと対象者の距離はビデオ画面の大きさにもよるが３２インチのビデオ画面で約1.５メートルをとる。



３）課題についての全般的な説明

検査実施前に以下の説明を行う。

これから検査を行います。検査は、『みなさんが会社(学校)で、みなさんと一緒に働く(学ぶ)仲間や指導してくれる人(上司や先生)と仲良くやっていくために必要な力』について知るためのものです。

みんなと仲良く仕事をしていくためには、仕事を一生懸命することも大切ですが、それ以外にも『相手の気持ちを大切にする』ことが必要です。

みなさんは、自分の気持ちがわかってもらえたときや、ほめてもらえたときは、どんな気持

ちになるでしょうか？　きっと嬉しい気持ちになると思います。でも、気にしていて、言われたくないなぁ、と思っていることを友達に言われたり、やってほしくないなぁ、と思っていることをされたりすると、悲しくなったり、怒ったり、嫌な気持ちになったりすると思います。そんなとき、すぐに『やめて下さい』と言えるといいのですが、なかなか言えないこともあると思います。こういうとき、『言わなくても、相手がわかってくれたらなぁ』と思いませんか？

では、みなさんは、相手のそんな気持ちをわかるでしょうか？

電話でお友達と話していて、相手が『怒っちゃったかな』と感じたことはありませんか？

そんなとき声の調子はどうでしょう？　楽しくお話ししているときとは、違いますね。

では、顔はどうでしょう？

お母さんやお父さんと話していて、『あれっ？ 怒られそうだぞ』とか『なにも言わないけれど､怒ってるぞ』とわかることがありますね。

そうです。私たちは、相手の声を聞いたり、顔を見たりすると、相手の気持ちが分かることがあるのです。そして、もし、自分が言ったりやったりしたことで、相手が怒っていたり、嫌な気持ちになっていることがわかったら、注意される前に、先に気づいて謝れたらいいですね。また、もし、相手が嬉しそうだったら、一緒に喜んであげられたらいいですね。

そこで、検査では、この**『相手の気持ちを考える』**ことをしてみたいと思います。

ここでの説明では、以下の２点を対象者に理解してもらえるように話すことが重要である。

① 相手の気持ちを知ることが日常生活の中で大切であること

② 相手の「声の調子」を聞いたり、「顔（表情）」を見たりすることで、相手の気持ちを知ることができること

４）具体的な回答方法の説明

回答用紙を配布して、以下の説明を行う。

「これから画面に、４人の人が登場します。１人ずつ映りますが、それぞれ『うれしかったり』『悲しかったり』『怒っていたり』『嫌な気持ちでいたり』します。皆さんは、その顔を見て、その人が今、どんな気持ちでいると思うかを考えて答えて下さい。『うれしそうだな』と思ったらここに○、『悲しいんだろうな』と思ったらここに○、『怒っているんだな』と思ったらここに○、『嫌な気持ちなんだろうな』と思ったらここに○、をつけて下さい。

回答は、１問につき１つずつです。どちらにしようかと迷うこともあるかもしれませんが、答えは１つに決めます。

また、回答は、なるべく速く決めるようにしましょう。というのは、みなさんも自分の気持ちはできるだけ速く分かってほしいと思うでしょう？ それと同じように、相手もみなさんにでき

るだけ速く自分気持ちをわかってほしいと思っているからです。
　ここでもう一度注意をしたいと思います。
　答えるのは、画面に映った人を見たときの皆さんの気持ちではありません。みなさんに考えて答えていただきたいのは、画面に映った人がどんな気持ちでいるかです」
　いいですね。ここまでで、何か質問はありますか。

　なければ検査を始めます。

説明に際しては、特にアンダーラインの部分について、よく確認し、誤解がないように注意する。

5）課題ビデオの再生

検査は以下のように編集されている。

チャイム音→番号提示(5秒間)→『音声・表情等の提示』→評定(6秒間)

課題が提示される前には毎回チャイム音が鳴る。「表情のみ」、「音声＋表情」の条件では、このチャイム音後に、対象者が顔を上げ、「画面を見ているかどうか」に注意する。特に、「音声＋表情」条件では音声も同時に流れるため、画面を見なくても答えられる。このため、下を向いたまま答える対象者がいる。検査者は対象者が顔を上げてビデオの表情に注視しているかを確認する必要がある。

6）検査に要する時間

課題数は１条件あたり３２課題である。検査時間は１条件あたり通常、１０分程度で終了するが、対象者によってはさらに時間がかかる可能性もある。休憩も含め、Ｆ＆Ｔ感情識別検査にかかる平均検査時間は３０分～４０分である。

7）回答の方法

課題の提示が終わったらビデオを一時停止し「この人はどんな気持ちでしょう？」と尋ね、対象者に回答を記入させる(記録用紙は巻末資料を参照)。対象者が小グループの場合には、回答が済んだら手を挙げさせる。全員の手が上がったら、次の課題に進む。

４つの感情以外の答は基本的に認めない。「わからない」あるいは「適当な答が見つからない」等の発言があった場合には、「最も近い感情」を選択するように促す。

回答方法に慣れたことが確認できたら、ビデオを止めずに（ビデオには、あらかじめ６秒間の評定時間が含まれている)、流れに従って検査を進める。

なお、評定に時間のかかる対象者がいた場合は、注意が必要である。この検査では、対象者が「見損なった」あるいは「見逃した」という理由で、前の課題を再度提示することは原則として禁止している。このため、検査者は検査を速く進めることに気を取られて、対象者が課題に回答できなくなることがないように注意することが必要である。

また、小グループに、特に評定に時間がかかる対象者がいる場合は、他の対象者の回答のリズムを崩すこと（評定後の余った時間に、よそ見をしたり私語をしたりする、など）があるので、グループを作る際には、なるべく評定にかかる時間が同一であることが予想されるグループを作ることが望ましい。

「この人はどんな気持ちでしょう？」などの声かけは、それ自体が感情のメッセージを含んでしまうことがあるため、十分に配慮が必要である。このため、課題が進み、対象者が回答方法を理解したと確信した時点で、声かけはやめる。

また、小グループの場合には、「終わりました」等、回答が終わったことを伝えようとする対象者がいるが、この場合は、「黙って、手を挙げるように」促す。

検査の最中は、検査者はできるだけ発言を少なくするように、また、対象者にはできるだけ発言させないように配慮する。特に発話に関して統制できない対象者は、個別に検査を行うこと。

3．採点と結果の整理

1）採点

採点は、巻末資料の正答表にしたがって行う。採点結果については、同様に巻末資料の採点用紙に記入する。記入例を表２に示す。

表2　　採点用紙の記入例

提示された音　声	対象者の回答				合　計	
	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		
幸　福	7	0	1	0	8	
悲しみ	1	4	0	3	8	
怒　り	1	0	6	1	8	
嫌　悪	0	3	1	4	8	正答率
合　計	9	7	8	8	32	66%

提示された表　情	対象者の回答				合　計	
	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		
幸　福	5	0	2	1	8	
悲しみ	2	2	3	1	8	
怒　り	0	2	5	1	8	
嫌　悪	0	0	4	4	8	正答率
合　計	7	4	14	7	32	50%

提示された表情＋音声	対象者の回答				合　計	
	幸福	悲しみ	怒り	嫌悪		
幸　福	5	0	3	0	8	
悲しみ	0	6	0	2	8	
怒　り	0	0	8	0	8	
嫌　悪	1	2	2	3	8	正答率
合　計	6	8	13	5	32	69%

２）結果の整理

結果の整理は、**「正答率」**と**「混同の傾向」**に基づいて行う。正答率が同じでも混同の傾向が異なれば、結果の解釈は異なったものとなる。

◆Ｆ＆Ｔ感情識別検査チェックシート（Ｉ）の記入

（１）の欄に数字を記入し、その後（２）以下の手続きに従って各欄に数字を記入、条件をチェックする。チェックシート（Ｉ）の記入は、各タイプ名がついた段階で終了とする。なお、チェックシート（Ｉ）は、音声（聴覚）と表情（視覚）の双方から同時に得た情報を統合する際に、どのような特徴があるのかについて知るためのものである。

以下の記入例は、表２の結果（p.10）を整理したものである。

記入例

Ｆ＆Ｔ感情識別検査 チェックシート （Ｉ）

年　　：氏名

（１）「音声のみ」、「表情のみ」、「音声＋表情」の正答率を記入する。

「音声のみ」	「表情のみ」	「音声＋表情」
６６　％	５０　％	６９　％

（２）「音声のみ」と「表情のみ」と「音声＋表情」の正答率に注目する。

《作業》各欄の該当する正答率に○をつける

高・受信タイプ ←→ 低・受信タイプ			
「音声のみ」	76%以上	75%～60%	59%以下
「表情のみ」	76%以上	75%～60%	59%以下
「音声＋表情」	83%以上	82%～65%	64%以下

《評価と基準》

①「高・受信タイプ」の各欄に○が３つ、縦に揃ったら→ 高・受信タイプ → **終了**

②「低・受信タイプ」の各欄に○が３つ、縦に揃ったら→ 低・受信タイプ → **終了**

③　①または②に該当しない場合 → （３－１）へ

（３－１）「音声のみ」「「表情のみ」と「音声＋表情」の正答率の差に注目する。

《作業》　「音声＋表情」の正答率から「音声のみ」の正答率を引いて、下記のA欄に記入する。
「音声＋表情」の正答率から「表情のみ」の正答率を引いて、下記のＢ欄に記入する。

A欄 「音声＋表情」－「音声のみ」	B欄 「音声＋表情」－「表情のみ」
3　％	１９　％

《評価と基準》

①　A欄とＢ欄が共に　１５％よりも大きければ　→　相補タイプ　→　**終了**

②　A欄とＢ欄が共に－１５％よりも小さければ　→　相殺タイプ　→　**終了**

③　①または②に該当しない場合　→　（３－２）へ

（３－２）　（３－１）に加えて、「音声のみ」と「表情のみ」の正答率の差にも注目する。

《作業》「音声＋表情」の正答率から「音声のみ」の正答率を引いて、下記のＣ欄に記入する。

C欄 「音声のみ」－「表情のみ」
１６　％

《評価と基準》

④－１　Ｂ欄とＣ欄が共に　１５％よりも大きければ　→　音声依存・Ｔタイプ　→ **終了**

④－２　Ｂ欄とＣ欄が共に－１５％よりも小さければ　→　音声依存・Ｆタイプ　→ **終了**

《評価と基準》

⑤－１　A欄が　１５％より大きく、
　　Ｃ欄が－１５％よりも小さければ　→　表情依存・Ｆタイプ　→ **終了**

⑤－２　A欄が－１５％より小さく、
　　Ｃ欄が　１５％よりも大きければ　→　表情依存・Ｔタイプ　→ **終了**

⑥　④または⑤に該当しない場合　→　特定の型には分類されない群

これらの群の中には、上記の①から⑤で検討した型には分類されないが、類似した傾向を有する対象者が存在する。

◇◆◇　対象者の

コミュニケーションタイプ ＝　音声依存・Ｔタイプ

◆Ｆ＆Ｔ感情識別検査チェックシート（Ⅱ）の記入

各欄の条件に従って、評価の欄に○、△、×を記入する。

なお、チェックシート（Ⅱ）は、「正答率」と「混同の傾向」から訓練が必要か、また訓練可能性が高いかどうかについて知るためのものである。

以下の記入例は、表２の結果（P.10）を整理したものである。

記入例

Ｆ＆Ｔ感情識別検査 チェックシート （Ⅱ）

年　　：氏名

◇◆◇ 採点結果に基づいて、以下の項目をチェックしなさい ◇◆◇

			評 価
① 視知覚の発達に困難が認められるか	☑ 認められない ☐ やや認められる ☐ 困難が認められる	○ △ ×	○ 注）
② 「表情のみ」の正答率が７５%以上か	☐ ７５%以上 ☑ ７５%未満	○ ×	×
③ 「音声＋表情」の正答率が８３%以上か	☐ ８３%以上 ☑ ８３%未満	○ ×	×

※ 以下、④では、「表情のみ」及び「音声＋表情」の各条件についてそれぞれチェックする。
「表情のみ」、「音声＋表情」のいずれかの欄に×があれば「評価」は×とする。

	「表情のみ」	「音声＋表情」	評 価
④ 『幸福』の欄の混同が合計で２つ以下か（縦・横の混同の合計数）	☐ ２つ以下 ○ ☑ ３つ以上 ×	☐ ２つ以下 ○ ☑ ３つ以上 ×	×

※ 以下、⑤では、「表情のみ」及び「音声＋表情」の各条件についてそれぞれチェックする。
⑤-a,b,c の「表情のみ」、「音声＋表情」のいずれかの欄に×があれば「評価」は×とする。
（６カ所中、１カ所でも×があれば、「評価」は×となる）

	「表情のみ」	「音声＋表情」	評 価
⑤-a 回答欄の網掛け以外の部分の誤りは１マスにつき３つ以下か	☑ ３つ以下 ○ ☐ ４つ以上 ×	☑ ３つ以下 ○ ☐ ４つ以上 ×	×
⑤-b 回答欄の網掛け以外の部分に２つ以上の誤りを持つマスが３カ所未満か	☐ ３カ所未満 ○ ☑ ３カ所以上 ×	☐ ３カ所未満 ○ ☑ ３カ所以上 ×	
⑤-c 回答欄の網掛け以外のすべてのマスに１つ以上の誤りが認められるか（ただし、『幸福』の欄はのぞく）	☑ 認められない ○ ☐ 認められる ×	☑ 認められない ○ ☐ 認められる ×	

訓練可能性の評価

訓練の必要な場合（３）に分類される（パタンＬ）。ただし、視知覚の発達に困難が認められないため、訓練による改善が期待される。

注）ここでは、視知覚の発達について検討可能な検査の結果を利用すること。また、視知覚の発達に困難が認められるかどうかについては、使用する検査毎にあらかじめ基準を設けておくこと。

◇◆◇　訓練可能性の評価について　◇◆◇

チェックシート（Ⅱ）のうち、①の「評価」の欄に×がついた対象者については、訓練可能性は低い。視知覚の発達の困難をどのように見積もるかは、用いた検査によって異なるため、あらかじめ基準を設けておくことが必要である。

また、言語的な記憶に著しい問題が指摘される(訓練用カードに記された２０文字程度の文章を暗記することが困難である)対象者の場合も訓練可能性は低い。この両者の場合以外については、以下のチェック表のパタンを参考に訓練の必要の有無を判断する。

チェックシート（Ⅱ）のうち、①の「評価」の欄に○もしくは△がついた対象者については、以下の１６のパタンにしたがって、訓練の必要性の有無を検討する。

訓練を特別に必要としない場合　（１）

（Ａ）		（Ｂ）		（Ｃ）	
②	○	②	×	②	○
③	○	③	○	③	×
④	○	④	○	④	○
⑤	○	⑤	○	⑤	○

※　（B）について、②が６８%以上なら訓練不要
　　６７%以下なら訓練対象者とする

訓練を特別に必要としない場合（２）
ただし、正答率の高さや混同の傾向よっては稀に訓練が必要となる場合もある

（Ｄ）		（Ｅ）	
②	○	②	×
③	○	③	○
④	○	④	○
⑤	×	⑤	×

※（Ｅ）について、②が６８%以上なら訓練不要
　　６７%以下なら訓練対象者とする

訓練が必要な場合（１）：特に快ー不快の混同に注意が必要な場合

（Ｆ）		（Ｇ）		（Ｈ）		（Ｉ）	
②	○	②	×	②	×	②	○
③	○	③	○	③	×	③	×
④	×	④	×	④	×	④	×
⑤	○	⑤	○	⑤	○	⑤	○

訓練が必要な場合（２）：特に一貫した回答傾向に注意が必要な場合

（Ｊ）		（Ｋ）	
②	○	②	×
③	×	③	×
④	○	④	○
⑤	×	⑤	×

訓練の必要な場合（３）：感情間の混同が著しい場合

（Ｌ）		（Ｍ）		（Ｎ）		（Ｏ）		（Ｐ）	
②	×	②	×	②	×	②	○	②	○
③	×	③	○	③	×	③	×	③	○
④	×	④	×	④	○	④	×	④	×
⑤	×	⑤	×	⑤	○	⑤	×	⑤	×